

身体表現指導のあり方

米倉慶子

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科)

(平成 29 年 11 月 2 日受理)

Keiko YONEKURA

(*Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyushu University Junior Collage*)

キーワード：基礎技能・表現力・感性・ねらい

I. はじめに

幼稚園教育要領における「表現」の項に「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と記述されている。これは、保育者が関わる指導書である。しかし、子どもに教え導くための指導書なのかと疑うほど、入学するほとんどの学生自身が美しさや感動する心がないに等しい。つまり感性に乏しい、自分なりの表現が出来ない、イメージも豊かではないという学生の状況である。しかし、この状況は現在に限ったことではなく、数十年前も変わらなかった状況を筆者は調査している。つまり、義務教育や高校での表現の指導では豊かな表現は身につかなかったことも考えられる。もちろん個人差や家庭環境も否めない。芸術的分野に取り組む機会がもう少し増え、イメージや感動させる機会や場、その機会に誘導する言葉かけが数多くあれば、少なくとも乏しい感性にはならなかったのではないだろうか。この状況ではあるが、養成校の担当教員は、まず学生の表現力や感性を高めることに授業の大半を費やさなければならない、しかし、子どもの指導法も徹底しなければならないもどかしさはあるが、並行して進めないと、学生が保育現場で子どもの指導に支障をきたすことになる。本稿は、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定子ども園教育・保育要領が改訂された今、もう一度原点に戻り、保育者養成における身体表現のあり方を探る。

2. 子どもへの指導の実際

1) 基礎的な動き

(1) 歩く

直線、曲線の上を歩く、速度を意識して歩く、かかと・つま先で歩く、頭に何かをのせて歩く、しゃがんで歩く、シングルサークルで手をつなぎ横に歩く、しのび足で歩く、曲に合わせて歩く

(2) 走る

前・後ろ・横に走る、速く走る、二人で手をつなぎ走る、ジグザグに走る

(3) とぶ

両足で前・後にとぶ、両足で高くとぶ、両足で速くとぶ、二人で手をつないで両足でとぶ、片足で両足同様にとぶ

(4) スキップ

一人でスキップをする、二人で手をつないでスキップをする、5人で横に並んで手をつなぎスキップをする、5人で縦に並び、前の人の肩に手を置いてスキップをする

(5) はう

尺取り虫・オットセイ・へびになってはう、四つんば

いになってはう

(6) ころがる

前・横にころがる、速くころがる、続けてころがる

(7) まわる

バレエのようにまわる、ひらひらとまわる

(8) ゆれる

片手・両手でゆらす、片足をゆらす、体全体で揺れる

(9) その他

押す・引く・つく・ちぢむ・のびる・緊張・脱力

(10) 拍子

手・足・体で2拍子・4拍子・3拍子感を味わう、それぞれの拍子を曲に合わせて手・足・体で表す

基礎技能の実際においては、歌や曲に合わせてリズム感や速度、強度を意識させ指導するよう説明している。この体験時に指導では欠かせない子どもの身体能力については、教科書説明時に筆者が読み上げ、次週の課題として子どもの観察、子どものダンス、子どもの身体能力の項を読み、感想を課題としてレポート提出させたうえで体験させている。また、留意点についてもそれぞれの基礎技能時に学生に考えさせ指導している。(10)の拍子については、2拍子、3拍子、4拍子を主に体験させているが、子どもにも同じく伝えることができるように、簡単なリズムの要素を取り入れている。

2) イメージ・模倣表現

(1) イメージ

音楽曲を聞いてのイメージ

(2) 模倣表現模倣表現

① 動物

ゾウ、ウサギ、オオワシ、ペンギン、ダチョウ、ゴリラ

② 乗り物

飛行機、自動車、電車、パトロールカー・ジェットコースター

③ 遊び

コマまわし・縄跳び・シーソー

イメージの指導においては、イメージの豊かさが、子どもの想像力の源であること及び、子どもらしい曲と限定しないで、あらゆるジャンルの音楽曲を用いることで、子どもにイメージ及び創造性を高めることについて、理解させるようにしている。さらに、イメージをしやすい動物や日常の身近な生活を、視覚や聴覚を用いてイメージに広がりを持たせる。

模倣表現の実際は、基礎技能でも取り上げるが幼児のフォークダンス教材で、主に動物、乗り物の模倣表現を取り上げている。子どもたちの模倣を主に取り上げ、保

育者の模倣は極力手本にしないよう説明している。それは指導者の模倣が、そのまま子どものイメージとして記憶され、その後の子どもの模倣表現に影響を与えるからである。自然界の模倣は、「幼児ダンス」の自由表現時に、自然界の雪や木の葉を取り上げ、ナレーションを考える体験をさせる。子どもはナレーションや言葉かけにより、表現の意欲が高まることを理解させる。

3) 手あそび・歌あそび

(1) 手あそび

おちゃらか・モンチッチ・ちゃちゃつぽ・なべなべそこぬけ・どのタケノコが背たかか・鬼のパンツ・魔法の杖・5人の小人・気のいいアヒル・げんこつ山のタヌキさん

(2) 歌あそび

あんたがたどこさ・おちたおちた・猛獣狩り

手遊びにおいては、子どもが集団生活の中で初めて友達と触れ合い協力する遊びであることを理解させたい。子どもが親しみやすい、表現力を要する手あそびを指導している。ここで取り上げているじゃんけんあそびにおいて、3歳児でじゃんけんが出来ない子どももいることを説明し、その場合の指導方法も伝えている。

歌遊びにおいては、実習で活用できるわらべ歌や、歌あそびを指導している。学生自身も遊び方を知っているため、様々な遊び方の情報交換をさせ、手や足、身体全体を使ってのあそび方や留意点について指導している。

3. 創作

創作に苦手意識を持っている学生は多い。なぜ創作をしなければならないだろうか、その意義から説明しなければならない。子どもが歌っている歌に自然に踊りだす保育者は、子どもの好感度も高い。どのようなジャンルの曲にでもすぐに創作ができることは、子どもの表現力に大きな影響を与える。入学後すぐに、学生が1曲全部のダンス創作をすることは難易度が高いので、1曲全部を創作した筆者振付の幼児ダンス曲を6曲用意している。この6曲は、親子のふれあいができる、リズムカルである、季節感がある、子どもが好感をもつことを意図して選曲している。この振付の中に基礎技能はもちろん、子ども向けのローテーション、手合わせ等、子どもが楽しさを感じる振付をしている。この6曲を通して学生には、対象年齢、保育行事、季節のダンス選曲の方法を理解させていく。

前奏・間奏・後奏などの部分創作は5曲体験させるが、この短い8拍、16拍の創作でも苦痛を感じる学生がいるので、二人組で取り組ませるようにしている。部分創作で一番難易度の高い前奏48拍、間奏72拍、後

奏24拍の長い創作体験は、子どもにダンスを指導するのではなく、保育現場の行事（お誕生会・生活発表会等）において、保育者が子どもに見せることを設定している。子どもがそのダンスを観てワクワクした気持ちや、ダンスをしたいと思わせることをねらいにしている。

1曲全部の創作においては、クラスを2分割にしてグループ創作にあたらせた。この創作は保育行事の運動会、5歳児の向けのダンスであることを設定して指導している。大きい集団の創作であれば、積極的に取り組む学生、消極的な取り組みの学生の問題が浮上するが、それはそれで学びになるので体験させている。リーダー性を持っている学生の創作過程、隊形変化等のアイデアを学び体験することで、消極的な学生も自然に技術を身につけていく。

4. 幼稚園教育要領に基づいて

豊かな感性を育むためには、まずは身近な日常生活の上の快の心や、感動を知ることから始まることを理解させている。例えば、園庭に新しい花が咲いての美しさ、形、色と感動する要素は多い。子どもがその花に興味を持つ環境、言葉かけにより感性は磨かれていく。まずは学生自身の感動体験を増やすことがひいては、子どもに豊かな感性をもたらす影響があること。そのことについて「表現」授業において、感動体験を発表する場を設けている。これまでの身体表現の基礎的な知識及び技能においても前述通り実施しているので、子どもへのイメージへのアプローチや、子ども同士の感動を共有させることの指導はある程度できると確信している。

子どもの表現力を豊かにするためには、表現への意欲を持たせることが大事である。この点については、学生に新しいダンス曲を紹介した際に、その曲に合う小道具を考えさせる。次に子どもが「早く踊りたい」と思わせるには、どのような方法があるのかを発表させている。さらに、保育室に常に小道具やお面、変身用具等を用意しておくことも、子どもの表現力向上の一端となることを理解させている。

学生の質問に「子どもの表現を受け止め共感する」ということが、わからないと質問がある。その質問には、2人組、5人組、2分割グループで活動する場合、お互いの意見を尊重し受け止めなければ創作は成立しないことを思い出させ、それが他者の表現を受け止めることに繋がることを説明する。これを理解することにより、子どもの表現を受け止め、共感することができるのである。もちろん、保育者は子どもたちの素朴な動きを見のがさず、快の言葉をかけること、そのことが、子どもに表現の意欲を持たせることにつながることを理解させている。

5. 「表現」のねらいについてのアンケート調査 「表現」の授業の到達目標を自己評価するアンケート調査をした際に一部、「表現」のねらいについて調査したことを報告する。

【アンケート調査方法】

1) 対象者

本学幼児保育学科 表現・音楽コース全員 47 名

2) 手続き

「表現」最終講義終了時、集団一斉法にて質問紙への自己記入を求めた。

3) 調査日

2017 年 5 月 31 日

4) 質問

- ・いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ
- ・感じたことや考えたことを自分なりに楽しむ
- ・生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ
上記の「表現」のねらいで身体表現を主とした場合、子どもたちに指導ができますか。（適する番号を○で囲み、理由も記述する）

①指導できない

②やや指導ができる

③指導できる

【アンケート調査結果】

回答率 100%

① 0 名

② 39 名（83%）理由未記入（1 名）

③ 8 名（17%）

《できる理由》

- ・子どもの表現が身につくように考えることができる
- ・熱心に身体表現の授業に取り組んでいるから
- ・自分のイメージを豊かに持ち、表現の伝え方を学んだから
- ・授業を通してダンスの楽しさを学んだから、指導できる
- ・表現が得意なので、指導できると思う（2 人）
- ・豊かな感性を持つ子供について調べ、授業で学んだから指導できる（2 人）

《やや指導ができる理由》

- ・様々な感情を体で表現することや、知識を身につけることが足りていないから
- ・まだまだ足りない表現力
- ・表現する力がないために、子どもへ伝えることは難しい
- ・表現はできるが、イメージしたことを言葉で伝えるこ

とができない

- ・具体的にどのような活動をするのか思いつかないから
- ・授業で学んだことは少し生かせると思ったから
- ・表現は自信があるので、少しは指導できると思う
- ・子どもへの言葉かけが勉強不足である
- ・イメージして表現を楽しむことができ、教えることに自信がついたから
- ・体を使った表現力を磨いたから
- ・まだ完ぺきに出来ないから
- ・授業で習ったことをアレンジできるから
- ・少しは教えることができると思うから
- ・自分なりの表現が出来るので、子どもにも指導が少しできると思う
- ・ねらいのすべてを教える自信がないから
- ・ダンス創作や表現することができるから（2 名）
- ・体験してできるように学んだから（2 名）
- ・子どもの発達段階から表現を考えることがあるから（2 名）
- ・まだ恥じらいがあるから（2 名）
- ・様々な表現の方法を学んだから（2 名）
- ・授業の中では伝えることができるけど、子どもに伝えることができるのか難しい（4 名）
- ・もっと勉強してできるようになりたい（4 名）
- ・表現は楽しむことができたが、こどもへの指導は自信がない（5 名）

6. 考 察

授業で取り上げている子どもの指導と実際のそれぞれの項目、アンケート調査について考察する。

1) 基礎的な動き

ダンスの基礎ステップとして大きな位置を占める。歩く、走る、とぶ、スキップについては、子どものダンスを指導する時に、それぞれのステップが取り上げられている場合において、様々なステップの仕方を学ばせ、年齢別の発達段階、身体能力についてもそこで取り上げられれば効果的であろう。その他の動きや拍子については、教科書で掲載指導の「手の動き」「足の動き」の指導時に取り上げることで、より効果的に理解できている。

2) イメージ・模倣表現

イメージ指導では、様々なジャンルの楽曲を取り上げることとはもちろんだが、子どもは、楽しさを感じることもイメージが広がる。指導の中で力を入れなければならないことは、言葉かけの技術を高めることである。これが解決できれば、子どもへの指導をするときに大きな力となる。

模倣表現の題材についても、実施している動物、乗り物、遊びを1年前期で体験させていることで問題はないと思う。本格的な模倣は現状の「幼児ダンス」で取り上げているが、もう少し時間を割いて指導し、学生が自信をもって子どもに指導できるように、検討しなければならないであろう。

3) 手遊び・歌遊び

手遊び・歌遊びは、筆者が受け持つ授業以外に、「音楽表現」の科目で手遊び歌遊びを体験している。筆者が取り上げている題材は、身体全体を使う手遊び、歌遊びを主としているのでこのまま取り上げていくことに問題はない。

4) 創作表現

少々、内容の詰め込み過ぎを感じる創作分野である。前奏・間奏・後奏の短い創作は問題ないが、長い間奏だけを取り上げ、1曲全部の創作は1年次ではなく、2年次の「表現」において取り上げることを検討すべきだと思う。

5) アンケート考察

「表現」のねらいを、実際に子どもへ指導できるか問うアンケート調査であるが、表現音楽コースの学生のみのアンケート調査なので、的確な結果ではない。しかし、子どもへの指導に関する調査なので参考のために取り上げた。アンケートの結果から、幼稚園教育要領「表現」ねらいは、約80%の学生が「やや指導できる」という回答である。つまり、自信をもって子どもに指導ができないということでもある。表現・音楽コースの学生は後期に「幼児ダンス」を履修するのでまだ、自信をもつ学生が増える可能性がある。しかし、アンケート調査を実施していない心理・環境コースの学生は、どちらかというと表現が苦手な学生が多い上に、今後身体表現の授業を受ける機会がないので、自信を持たないまま卒業する学生が多いことが推察される。学生が指導するにあたり不足に感じていることに、知識、表現力、子どもに伝えること、具体的な表現活動イメージ、ねらいのすべてを教える自信、羞恥心克服をあげている。このことから、初期段階に「表現」のねらいを意識させる内容を取り上げなければならないことが課題となる。「リズム表現」の1週目に、幼稚園教育要領「表現」のねらいを資料として配布し、一応の説明をするが、折にふれ幼稚園教育要領「表現」のねらいを意識させる、授業改善を検討しなければならない。また、保育者である限り、自分自身の感性を常に磨き続けることを指導している。私たち養成者も感性を豊かにする情報を、機会あるごとに提供することも始めなければならない。

7. まとめ

身体表現の在り方を探るため、実施した指導法を記述したが、それぞれの項目から検討課題が見えてきた。卒業までに学生の羞恥心を克服する援助や、表現力を高め、子どもに自信をもって指導できる保育者を送りだすべく力を注いできたが、学生自身の表現力向上重視型に傾倒していたかもしれない。保育者として子どもに指導できる力の、授業内容改善が求められている今回、文部科学省の「領域に関する専門的事項」シラバスのモデルカリキュラムに準じたシラバスの検討、ICTの導入を含め、喫緊に解決し次年度に臨みたい。

参考文献

- 1) 久富さよ子 (2005)「子どもの心の学び方」西日本法規出版 57-59
- 2) 久富さよ子、米倉慶子 (2008)「子どもに学ぶ」ふくろう出版 33-35
- 3) 米倉慶子 (2007)「動きの発見」権歌書房 8-18
- 4) 全国大学音楽教育学会九州地区学会編 (2014) カワイ出版 74-89
- 5) 文部科学省 (2017)「新幼稚園教育要領」17-18